

経営者がみたマドックス

Nicholas Byam Shaw

ジョン・マドックスが本誌の編集長を務めた1期目（1966～73年）の後半には、後のマクミラン出版社（Macmillan Publishers Ltd）の一部門である Macmillan Journals の社長も兼務していた。

その結果、マドックスの影響力は *Nature* 一誌にとどまることなく社内に広く及んでいき、さらには、Macmillan Journals が発行するほかの学術誌をもはるかに越えて広がっていった。当時の同社は、歴史ある出版社として、1869年に創刊された *Nature* のほか、ヘンリー・ジェイムズ、トマス・



1960年代初頭の
マドックスとその妻
ブレンダ。

ハーディ、ラドヤード・キップリング、W. B. イェイツ およびジョン・メイナード・ケインズなどの著作も扱っていた。しかし、同社の書籍や雑誌のリストは古色蒼然としており、入れ替えが行われることもなかったため、より新しい、より主張のはっきりした出版社に追い抜かれるばかりだった。

マドックスは、熱意と優秀な頭脳をもつ新人には、最小限の訓練を受けさせたら（それは必ず職場での実際の作業を通じて行われなければならない）、責任ある仕事をさせてよいと信じていた。この姿勢は、聡明な大学生や大学院生には非常に魅力的だった。実際、マドックスが要求する厳しい水準をクリアした新人たちは大いに活躍した。こうしてマドックスは、若く有能な編集者と科学者を Macmillan Journals によび込んだのである。

この方針は、1960年代末から1970年代初頭にかけて強化した組織を劇的に若返らせ、急成長に転じさせた。マドックスの魅力と Macmillan Journals の成長ぶりをもってしても、才能あふれる人材の野心を常に満たすことはできなかった。一部のスタッフは数年後に退社し、その多くが別の出版社で大成功を取めた。しかし、大半のスタッフはとどまったので、Macmillan Journals は年々豊かになり、ますます活性化していった。

マドックスはまた、*Education and Training*、*Drugs and Society*、*Science Studies* などの新しい学術誌についても責任を負っていた。彼を必要としていたのは科学だけではなく。彼は、ほかの業務拡張計画にも深く参画した。なかでも重要なのは、あらゆる学問分野（その大半は科学以外の分野だった）の参考図書への関与である。マドックスの社長在任中には、生物学と物理学の論文をより多く掲載するために *Nature New Biology* と *Nature Physical Sciences* という2冊の週刊学術誌を創刊するという実験的な試みも行われた。このアイデアは（少なくとも商業的には）時期尚早であり、姉

妹誌はすぐに廃刊になった。しかし、マドックスが1990年代初頭に再挑戦したときには見事に成功し、彼が1995年に引退したときには、*Nature* の名を冠した月刊学術誌が3冊創刊されていた（現在では、その数はもっと多い）。

マドックスは1975年に Nuffield 財団の理事に任命されたが、それ以前からさまざまな公職についていた。1974年には現在の BBC ラジオ3にあたるラジオ局で *Scientifically Speaking* という隔週の番組を開始して好評を博している。しかし、マドックスの最大の願いは、*Nature* と読者の距離を近づけ、より多くの読者を獲得することにあった。1980年に編集長に復帰してからの彼は、この願いを実現するために力を注いだ。マドックスは相変わらずの鋭い眼力で才能ある原石を発掘していった。彼の励ましは聡明で献身的なスタッフを奮い立たせ、*Nature* はこれまで以上の成功を取めた。

エネルギーあふれるマドックスは、年若い同僚を挑発し、疲弊させることが（時には憤慨させることも）あった。高速道路での彼の運転は、年長の同僚を恐怖に陥れた。彼の情熱は周囲の人々を巻き込んだ。引退するその日まで、彼は人々から尊敬され、それと同じだけ大目に見てもらっていた。彼は退屈に耐えられず、ほかの人を退屈させることができなかった。彼は情が深く、すばらしく頭が切れた。多くの人が彼との友情を大切に、誇りに思っていた。 ■

Nicholas Byam Shaw (ニコラス・バイアム・ショー) は、1964年にマクミラン出版社 (Macmillan Publishers Ltd) に入社し、1969～1990年まで社長を務めた。